

ロビンズのケイパビリティ・アプローチ

－ケイパビリティ・アプローチの強みと弱み－

佐々木 亘

The Capability Approach in Ingrid Robeyns

－Some Strengths and Weaknesses of the Capability Approach－

Wataru Sasaki

イングリッド・ロビンズは、センのケイパビリティ・アプローチを擁護する一方、このアプローチの三つの強みと一つの弱みを示している。第一の強みは、問題とするケイパビリティや機能が、家族単位や共同体単位ではなく、あくまで「個人の固有性」として捉えられている点である。特に女性の場合、個人としてよりも家族単位、あるいは家そのものにおけるはたらきの中で、個人的な要素が解消されてしまう傾向がある。第二の強みは、労働市場だけではなく、労働市場外の要素も取り入れるため、数量化しにくい、「収入や富による分析だけでは捉えることができない」ところの、「福祉の配分における複雑さとあいまいさ」に関してもアプローチの対象とすることができる点である。第三の強みは、人間の多様性を明確に前提としている点である。そして、弱みとはこのアプローチによる分析を現実の社会に適合させるためには付加的な社会理論が要求される点である。しかるに、アキナスの自然法論のうちに、かかる社会理論に関する新たな可能性が展望される。

Key Words: [ロビンズ] [セン] [ヌスバウム] [ケイパビリティ] [アキナス]

(Received September 24, 2019)

序

現代の正義論において、重要なアプローチの一つが、「ケイパビリティ・アプローチ (The Capability Approach)」である。このアプローチは、主にアマルティア・センとマーサ・C・ヌスバウムによって開発されたものだが、ヌスバウムは閾値という観点から人間の中心的なケイパビリティを10にリスト化しているのに対し⁽¹⁾、センはそのようなリスト化を拒んでいる。筆者はこれまで、ケイパビリティ・アプローチと、そのリスト化の是非について研究を進めてきたが⁽²⁾、今回はヌスバウムを批判してセンのケイパビリティ・アプローチを擁護しているイングリッド・ロビンズに焦点を当てて、ケイパビリティ・アプローチの強みと弱みについて考察する。ロビンズは、“Sen’s Capability Approach and Gender Inequality: Selecting Relevant

* 鹿児島純心女子短期大学生生活学科生活学専攻現代ビジネスコース (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

Capabilities” という論文の中で、センのケイパビリティ・アプローチの特徴について、次のように言っている

センのケイパビリティ・アプローチの重要な特徴は、その特定されていない性質である。ケイパビリティ・アプローチは、思考のフレームワークであり、標準となる道具であるが、我々の標準的な質問のすべてに対して、我々に完全な答えを与えるような、十分に特定された理論ではない。それは、どのように不平等や貧困を測定するかを規定する数学的なアルゴリズムではないし、正義に関する完成した理論でもない。厳密に言って、ケイパビリティ・アプローチは、評価空間はケイパビリティ空間であるべきとただ主張するに過ぎない⁽³⁾。

ヌスバウムとは異なり、センのケイパビリティ・アプローチは明確なリストを示していない。彼は、「所与の、前もって決定されたウエートに関する探索は、概念的に根拠のないものであるだけでなく、使用される評価とウエートは、理にかなった仕方では、我々自身の絶え間ない精査と公開討論の範囲で当然影響を受けるという事実を見落としている」と言っている⁽⁴⁾。すなわち、ケイパビリティの内容等は「我々自身の絶え間ない精査と公開討論」にもとづいてその都度決定すると言うのがセンの立場と言えよう。そのため、「その特定されていない性質」が大きな特徴となる。

ケイパビリティ・アプローチは、「十分に特定された理論」でも、「正義に関する完成した理論」でもない。ケイパビリティ空間における評価にもとづいて福祉の向上を実現しようとする「思考のフレームワーク」であり、「標準となる道具」である。したがって、ケイパビリティ・アプローチを議論の出発点に据えることはできても、議論そのものを推進するためには別の理論に頼らなければならない。このことは、ケイパビリティ・アプローチの使用や評価にどのような影響を及ぼすのであろうか。

I. 個人主義的理論

ロビンズは、「なぜケイパビリティ空間において規範となる評価を行うのか、そして、なぜこのフレームワークは男女不平等の分析にとって興味をそそるのか」と言って、ケイパビリティ・アプローチにおける三つの強みと一つの弱みを語っている⁽⁵⁾。第一の強みについて、次のように言っている。

第一の利点は、機能 (functionings) とケイパビリティが個人の固有性であるという点である。そこで、ケイパビリティ・アプローチは、倫理的に（あるいは規範的に）個人主義的な理論ということになる。このことは、我々の規範的な判断において、それぞれの個人が考慮に入れられるということを意味している。倫理的な個人主義とは、規範的な判断の単位は個人であって、家族や共同体ではないということを含意している。同時に、ケイパビリティ・アプローチは存在論的な意味で個人主義的なものではない。それは、原子論的な個人を想定しているわけでも、我々の機能とケイパビリティが他者への、あるいは、他者の行為への関心とは

無関係であるわけでもない。社会的そして環境上の変化の要因はまた、社会的規範や差別的な慣習のような、多数の社会活動の特徴を考慮に入れさせる。要するに、ケイパビリティ・アプローチの、倫理的な意味で個人主義的で、存在論的な意味で個人主義的ではないという特質は、福祉と不平等の分析にとって、望ましい特徴を示している⁽⁶⁾。

ケイパビリティ・アプローチの第一の強みは、問題とするケイパビリティや機能が、家族単位や共同体単位ではなく、あくまで「個人の固有性」として捉えられている点である。特に女性の場合、個人としてよりも家族単位、あるいは家そのものにおけるはたらきの中で、個人的な要素が解消されてしまう傾向がある。育児も家事も介護も女性がして当たり前という状況は、現在においても珍しくない。

しかるに、ケイパビリティ・アプローチでは、「我々の規範的な判断において、それぞれの個人が考慮に入れられる」ことが前提となる。判断の対象となるのは、個々の人間が有する、あるいは有すべき機能やケイパビリティである。その一方、かかる「倫理的な個人主義」は、個人を他者から切りはなして抽出するような、「存在論的な意味」での個人主義ではない。「規範的な判断の単位は個人」であっても、その個人は「原子論的な個人」ではなく、共同体の中で、他者との関係において生活しているのであるから、「他者への、あるいは、他者の行為への関心とは無関係」であるわけではない。

さらに、このような倫理的で個人主義的な判断は、一度示されれば固定されるような、特定されたものではなく、「社会的そして環境上の変化の要因」に応じて「多数の社会活動の特徴を考慮に入れ」た流動的な判断となるであろう。そして、「倫理的な意味で個人主義的で、存在論的な意味で個人主義的ではないという特質」を持ったケイパビリティ・アプローチは、現実的に福祉や不平等を分析し、課題を具体的に示すためには、きわめて望ましい理論ということになる。

これらの点は、ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチにもあてはまる。註(1)で挙げられている10のリストは、すべて個人に帰せられるケイパビリティである。その一方、「他者とともに、そして他者に向かって生きることができ、他者を認め、他者に関心を示すことができ、社会的相互作用のさまざまな形態に携わることができること」のように、他者の存在は、個人のケイパビリティにおいても重要な要素となる。

Ⅱ. 労働市場と労働市場外

次いで、ロビンズはケイパビリティ・アプローチの第二の強みに関して、次のように言っている。

ケイパビリティ・アプローチの第二の利点は、労働市場に限定されておらず、労働市場と労働市場外の両方の状況において、人々のなったり行ったりすることに注目する点である。我々の規範的な分析において福祉の労働市場外の次元を含めることは、収入や富による分析だけでは捉えることができない、福祉の配分における複雑さとあいまいさを明らかにするであろ

う。このことは、男女不平等に関する研究にとって、きわめて重要である。フェミニストの経済学者は長年にわたり、労働市場経済と労働市場外経済の両方におけるプロセスと結果に注意を払う必要があると訴え続けている。収入、所得、定職の比較のように労働市場経済のみにもとづく不平等の比較では、ケアの仕事、家事、ドメスティック・バイオレンスからの自由、協力的な社会のネットワークの有用性のような、福祉が持ついくつかの重要な局面を除外してしまう。労働市場のみにもとづく比較では、女性が男性よりも多くの時間を労働市場外で費やすという事実を見逃すのである。これらの局面は、福祉と不利な条件に関する性別に関連した評価において、特に重要である⁽⁷⁾。

ケイパビリティ・アプローチの第二の強みは、労働市場だけではなく、労働市場外の要素も取り入れる点である。そのため、数量化しにくい、「収入や富による分析だけでは捉えることができない」ところの、「福祉の配分における複雑さとあいまいさ」に関してもアプローチの対象とすることができる。

金の流れを分析するのが経済学であると思われがちだが、金銭の授受を伴わない、あるいはそれを主な目的としないような経済活動は、昔からきわめて活発に行われている。これら労働市場外の経済活動を分析しようとしている経済学者も少なくない。たとえば、筆者の恩師の一人である野尻武敏神戸大学名誉教授は、2011年に出版された『経済社会思想史の地平』の中で、次のように言っている。

これらの財政破綻や新しい貧困も重要な原因となって、やがて中間組織に新しい動きが目立ってくるようになった。非営利のNGOあるいは広義のNPOの急増である。高齢者介護、自然保全、文化活動、生活改善等に、各種のボランティアな団体がその数を増し、しばしば行政の分野と考えられてきた諸機能を果たすようになって、その社会的役割を高めてきた。(中略)今日の経済においては、こうして、従来の市場セクターと公共セクターに、もう一つ新しいセクターが形成されてきつつある。イギリスでは一般に「ボランティアセクター」、フランスでは「社会的セクター」と呼ばれているが、いずれにしてもこうなると、経済社会の全体は三元的に構成されてくることになる。市場基調の混合体制への動向とともに、新しい世紀の経済社会体制の方位を示すものと見て、まず間違いないであろう⁽⁸⁾。

野尻先生は残念ながら昨年亡くなられたが、「経済社会の全体は三元的に構成されてくる」という指摘はまさに正鵠を射ている。現在の日本を考えても、市場による「自助」と国家のような公共による「公助」だけでは、社会はもはや十全に機能しない。じっさい、「高齢者介護、自然保全、文化活動、生活改善等に、各種のボランティアな団体」が、「しばしば行政の分野と考えられてきた諸機能」を担ってきている。中間組織による「共助」は不可欠であり、自助・共助・公助の三層構造は様々な局面で活用されている⁽⁹⁾。今後、このような三元体制はますます経済社会の理解に欠かせない存在となるであろう。

ともあれ、労働市場外の要素に着目することにより、ケイパビリティ・アプローチは福祉等の分析により現実的な仕方でかかわることになる。「ケアの仕事、家事、ドメスティック・バ

イオレンスからの自由、協力的な社会のネットワークの有用性のような、福祉が持ついくつかの重要な局面」は、労働市場経済では分析することができない。近年、経済学においては「利他性」が様々なさまざまな仕方活発に議論されているが、このことはまさに、労働市場外経済に関する分析である。

Ⅲ. 人間の多様性

ロビンズは、ケイパビリティ・アプローチの第三の強みに関して、以下のように述べている。

ケイパビリティ・アプローチの第三の強みは、障害があるか、妊娠しているか、ケアをする責任があるかどうかということに加え、人種、年齢、民族性、性別、性的関心、地理上の位置のような、人間の多様性を明白に認めることである。(中略) ケイパビリティ・アプローチのこの特質は、男女不平等の分析にとって重要である。センによる人間の多様性への関心は、労働市場外労働や仕事量全体における家族内の不平等を無視する標準的な厚生経済学における傾向と、著しく対照的である。平等性は、労働市場の次元に排他的な焦点を当てながら、結局“男性の観点”で測られる。正義に関する多くの理論が男性と女性による生活を呼びかけるよう訴えているが、より綿密な精査により、男性の生活が標準を形成し、性別による不平等と不正義は忘れ去られるか、隠れたまま残り、そして間接的に正当化されることが明らかであると、フェミニストの学者は主張している。たとえば、正義に関する多くの理論が、家庭は愛、正義、連帯感が支配している公平で社会的な制度であると単純に想定している。この想定は、家族内の不平等を理解し分析するための構図そのものにおいて、これらの理論を不適切なものとさせる。(中略) 機能の、そしてケイパビリティの空間において男女不平等を概念化することにより、人々の性別から生み出される多様性を含みながら、人間の多様性を説明するより広い視野が広がっている⁽¹⁰⁾。

ケイパビリティ・アプローチの第三の強みは、人間の多様性を明確に前提としている点である。註(1)でヌスバウムが「自尊心と恥辱を受けないことに関する社会的基盤を持っていること。他者と同等の価値を持った威厳ある存在として扱われることができること。このことは、人種、性別、性的指向、民族性、社会階級、宗教、国籍に基づいて差別がないという規定を伴う。」と指摘しているように、人間の多様性が確保されていることが、このアプローチにとって重要なのである。

そして、この人間の多様性は、男女不平等を正しく理解するうえで欠かすことができない。「労働市場外労働や仕事量全体における家族内の不平等」は、労働市場経済においては正しく捉えられていないだけでなく、多様性に焦点を当てないかぎり、この不平等は理解されない。じっさい、かかる不平等そのものがジェンダーによるバイアスから生み出され、測られ、正当化されている。そのため、「男性の生活が標準を形成し、性別による不平等と不正義は忘れ去られるか、隠れたまま残り、そして間接的に正当化されること」になる。そして、「家庭は愛、正義、連帯感が支配している公平で社会的な制度である」という想定そのものが、家族内の男女不平

等を隠ぺいする結果にいたることは、容易に想像される。ケイパビリティという観点から男女不平等を問題とすることは、ジェンダーにもとづく多様性を正当に示すことになるであろう。

IV. 社会理論の必要性

以上のように、ロビンズはケイパビリティ・アプローチの三つの強みを説明している。しかし、彼女はこれらとは対照的にこのアプローチが有する一つの弱みに関して、次のように言っている。

しかし、これらの肯定的な特質にもかかわらず、ケイパビリティ・アプローチはまた、その特定されていない性質から生じる、一つの大きな難点を持っている。ケイパビリティの平等主義は、厳密に言えば、不平等の査定をする際、我々はケイパビリティに焦点を当てるべきであるとただ主張するに過ぎない。しかし、すべての価値評価は、暗示的であれ明示的であれ、個人的、社会的そして環境上の変化の要因に関する、そして選択に関する規範的な理論についての説明を含んだ、付加的な社会理論を支持する。ケイパビリティのフレームワークに我々がどの社会理論を付加するかに依存して、我々はきわめて異なる規範的な結末にいたる。もし、社会理論が、人種差別者、同性愛嫌悪者、性差別者、老人差別者、ヨーロッパ中心主義者、あるいは何かほかの仕方では偏見を持った者によるならば、ケイパビリティの評価はそれなりに影響を受ける⁽¹¹⁾。

ロビンズは「センのケイパビリティ・アプローチの重要な特徴は、その特定されていない性質である」と先に指摘しているが、まさにこの特徴が大きな弱みとなる。センは「使用される評価とウエートは、理にかなった仕方では、我々自身の絶え間ない精査と公開討論の範囲で当然影響を受ける」としてケイパビリティのリスト化には反対するだけではなく、ケイパビリティの内容を特定化することを拒んでいるように思われる。

しかしながら、「ケイパビリティ・アプローチは、評価空間はケイパビリティ空間であるべきとただ主張するに過ぎない」のであれば、このアプローチを福祉や不平等を分析する「標準となる道具」とすることはできても、その分析を現実の社会に適合させるためには「付加的な社会理論」が、センのアプローチにもとづくかぎり、要求される。その結果、「ケイパビリティのフレームワークに我々がどの社会理論を付加するかに依存して、我々はきわめて異なる規範的な結末にいたる」ことになる。

問題は、ケイパビリティ・アプローチと、それに付加される社会理論との間に、距離ないし断絶が存するからであると考えられる。ロビンズはヌスバウムを批判してセンのアプローチを擁護する一方、独自のリストを提示している⁽¹²⁾。このことはセンの方針に反するように思われるが、かかる距離を埋めようとする彼女なりの努力とも解されよう。しかし、このリストを註(1)のヌスバウムのものと比較すると、ロビンズ独自のリストというよりは、ヌスバウムの焼き直しのように感じられる⁽¹³⁾。

とすると、ヌスバウムがケイパビリティをリスト化しているのも、かかる距離を埋めて、ケ

イパビリティ・アプローチそのものを社会理論として活用することが目的であるというようにも考えられる。じっさい、ヌスバウムは『正義のフロンティア』の中で、次のように言っている。

所得や富に焦点を合わせることに對して、ケイパビリティ・アプローチはよりいっそう根源的な批判を加えることができる。(中略)しかし、我々がそのような批判を、説得力を持って展開できるようになる前に、どんなに暫定的で変更可能なものであろうとも、何らかのリストを採用する必要がある。そのリストによって、もろもろのケイパビリティは、基本的な社会正義がその観点から定義されるところの、人間の中心的な権原としてみなされるようになる。このようなリストを作ることに気乗りしないセンには、ケイパビリティを用いて社会正義の理論を明確にすることは難しいと私はほかのところで示唆していた⁽¹⁴⁾。

ヌスバウムにとってケイパビリティのリスト化は、社会正義を推進させるために必要なものであって、社会正義を定義するためには、人間の中心的な権原を正義が前提とする権利として確立されていなければならないが、このことは、ケイパビリティのリスト化によって可能になるとしている。註(1)のように、詳細な仕方でケイパビリティをリスト化することにより、このアプローチそのものが一つの社会理論として位置づけられるのであるから、「付加的な社会理論」は必要なくなる。ケイパビリティのリストは、社会正義の実現のための要件として必要とされ、この点からヌスバウムはリスト化しないセンを批判している。たしかに、社会正義の理論を構築するために、ケイパビリティという概念はきわめて有効である。

結び

さて、最後に筆者の考えをまとめていきたい。まず、ロビンズはケイパビリティ・アプローチの第一の強みとして、「倫理的な個人主義」を掲げているが、この点は注意する必要がある。野尻名誉教授は先に引用した書の最後を、次のように結んでいる。

この世界では人間のみが個々のそうしたパーソン、つまり人格なのだから、人間の尊厳も、個人としての人間よりも、人格としての人間について言われるべきであろう。となると、用語法の問題もあるが、今日、求められるのは、個人主義の徹底ではなしに、個人主義から人格主義への変換だということになるのではないだろうか⁽¹⁵⁾。

個人主義の徹底は、ともするとエゴイズムに変容する。自分のことだけにに関心を持つような個人主義では、共助の余地がない。ともに助け合うという姿勢がなければ、連帯性は生まれてこない。「個人主義から人格主義への変換」こそ、これからの社会で求められてくるのではないだろうか。

したがって、ケイパビリティ・アプローチがかかわる個人主義も、人格主義へと変えていかなければならない。すなわち、個々の人格を尊重するということを前提にしたアプローチとするのである。ロビンズは、「尊敬：尊敬され、威厳を持って処遇されることができること」を

ケイパビリティの一つとしてリスト化しているが、個々人がそれぞれ固有の尊厳を持った存在として理解されることがケイパビリティ・アプローチの大きな前提となるであろう。

ロビンズはケイパビリティ・アプローチの第二の強みとして、「労働市場と労働市場外の両方の状況において、人々のなったり行ったりすることに注目する点」を挙げている。この点はとても重要であると言えよう。ヌスバウムのリストにもある、「自分自身の選択による宗教的、文学的、音楽的などの作品やイベントを経験したり創作したりすることと関連して、想像力や思考をはたらかせることができること。政治的・芸術的双方のスピーチに関連して表現の自由を、そして、礼拝の自由をそれぞれ保障することにより保護された仕方で自分の心をはたかせることができること。楽しい体験を持ち、そして無益な苦痛を避けることができること。」や、「他者とともに、そして他者に向かって生きることができ、他者を認め、他者に関心を示すことができ、社会的相互作用のさまざまな形態に携わることができること。他者の状況を想像することができること。(このケイパビリティを保護することは、協力関係のこのような諸形態を形成し育む制度を保護することであり、集会と政治的スピーチの自由をも保護することを意味している)。」という要素も、労働市場外の活動が主になっている。たしかに、労働市場外の要素は数量化されにくく、主観的な部分も大きい。しかし、労働市場経済の分析だけでは、人間の経済活動を正しく捉えることにはならない。経済労働市場外の経済をいかに分析するかは、今後の経済学の大きな課題である。

ロビンズはケイパビリティ・アプローチの第三の強みとして、「障害があるか、妊娠しているか、ケアをする責任があるかどうかということに加え、人種、年齢、民族性、性別、性的関心、地理上の位置のような、人間の多様性を明白に認めること」を挙げている。この点も重要である。特に、日本では男女不平等の状況はいっこうに改善されていない。世界経済フォーラムが2018年12月に発表したGlobal Gender Gap Reportによると、Global Gender Gap Indexの国別ランキングで、日本は対象となった149か国中なんと110位である⁽¹⁶⁾。したがって、女性のケイパビリティをいかに保護し向上させていくかを具体的な社会理論として示していかなければならない。この点は、ケイパビリティ・アプローチの弱みの解消にもつながるであろう。

筆者は、アキナスの自然法論のうちに、ケイパビリティ・アプローチの新たな可能性が展望されるのではないかと考えている。アキナスは、「自然法は複数の規定を含むか、それともただ一つだけか」を論じている、『神学大全』第二―一部第九四問題第二項の主文で、次のように言っている。

善は目的という性格を、これに対して悪はその反対の性格を持つがゆえに、それへと人間が自然本性的な傾きを持つところのものをすべて、理性は、自然本性的な仕方では、善なるものとして、そしてその結果、行動によって追求すべきものとして捉え、また、それらとは反対のものを、悪であり避けるべきものとして捉える。それゆえ、自然本性的な傾きの秩序にそくして、自然法の規定に関する秩序は存している。しかるに、第一に、人間には、そこにおいてすべての実体と共通するところの、自然本性にもとづく善への傾きが内在している。じっさい、いかなる実体も、自らの自然本性にそくして自らの存在の保全を欲求するのである。そして、この傾きにしたがって、自然法には、それを通じて人間の生命が保全され、また、

それに反するものが妨げられるところのことながら属している。第二は、そこにおいてほかの諸動物と共通しているところの自然本性にそくした、何かより特別なものへの傾きが人間に内在している。そして、これに関しては、雌雄の交わりや子の育成、およびこれと同様なことがらのような、自然がすべての動物に教えたところのことながら自然法に属すると言われる。第三の仕方では、人間にとって固有である理性の本性にそくした善への傾きが人間に内在している。すなわち、神に関して真理を認識することや、社会のうちに生活することに関する自然本性的な傾きを人間は有している。そして、このことにそくして、自然法にはこのような傾きにかかわることがらに属しているのであって、たとえば、人間が無知を避けるべきであるとか、親しくつきあっていくべき人に嫌な思いをさせないとか、またこの傾きにかかわる、ほかのこのようなことがらである⁽¹⁷⁾。

人間は、善を目的とする仕方、行為を具体化させる。悪を行う場合も、悪を何らかの善として捉えているのである。じっさい、理性は、本来、自然本性的な傾きに合致するものを善として、反するものを悪として捉える。したがって、実践理性にとっての「自然本性的な仕方」とは、人間の「自然本性的な傾き」に由来しており、自然法の規定は、かかる根元的な傾きの秩序にそくして成立している。

しかるに、人間のうちに見いだされる第一の原初的な傾きは、「そこにおいてすべての実体と共通するところの、自然本性に基づく善への傾き」である。人間とは、もっとも共通的な意味において、何らかの「実体」にはほかならない。この第一の自然本性的な傾きの秩序にそくした自然法の規定は、「自らの存在の保全」として捉えられる。人間の場合、その「存在」とは何よりも自らの「生命」を意味している。したがって、この第一の「傾きに」したがって、自然法には、それを通じて人間の生命が保全され、また、それに反するものが妨げられるところのことながら属している。

人間のうちに認められる第二の自然本性的な傾きとは、動物的本性にもとづく傾きであり、単なる「生命の保全」ではなく、動物として生きることへの「何かより特別なものへの傾き」として捉えられる。そして、この傾きにおいて、「自然がすべての動物に教えたところのことながら自然法に属すると言われる」。この第二の傾きは、「雌雄の交わりや子の育成」という点からして、いわゆる「種の保全」にかかわると言えよう。たしかに、家庭生活そのものには理性的要素が多く含まれているが、種の保全という面では動物と共通している。

そして、人間のうちに見いだされる第三の自然本性的な傾きとは、「人間にとって固有である理性の本性にそくした善への傾き」であり、人間の社会的生活はこの最終段階ではじめて問われている。人間が人間らしく生きるためには、何らかの共同体が必要であるということは明らかであるから、社会的な常識を持ち、ともに社会的生活を営む人々とことをかまえたりすることなく、社会の一員として生活することが自然法に属している。

さらに、「神に関して真理を認識すること」は、本来的にはキリスト教の神認識を意味するとしても、たとえば、「宗教的な真理へと開かれている」や、「目に見えないものに対して畏敬の念を抱く」ように、より普遍的に解釈することは、けっして不可能ではないであろう。じっさい、意識するか否かにかかわらず、宗教心とでも言うような何か宗教的な認識が、人間の社

会生活そのものの根底に認められるように思われる。それは、共同善の超越性に関する認識である。すなわち、「神に関して真理を認識すること」は、「社会のうちに生活すること」と別個のことがらではなく、自らを超えた何かを共同善として認識することと、人間が社会において人間的な生活を営むことは、相互に関係づけられうると考えられる。

ケイパビリティとしては、以上のアキナスの分析による、実体としてのケイパビリティ、動物的本性としてのケイパビリティ、理性的本性としてのケイパビリティがリスト化されよう。そして、それぞれから具体的な機能を導くという仕方では社会理論を構築することは、決して不可能ではないであろう。このことは、おそらく正義論において、共同善への秩序づけというフレームワークのもとに展開されうると考えられるが、この点については、この点は今後の課題としたい。

ともあれ、リベラリズムそのものにある種の限界が認められる状況で、コミュニタリアニズムとコスモポリタニズムをいかに調和させていくかは喫緊の課題であり、この課題の解決に具体的な仕方がかかわっているのが、まさにケイパビリティ・アプローチであると考えられる⁽¹⁸⁾。そういう意味でも、ケイパビリティ・アプローチは現在においてきわめて重要な正義論なのである。

註

(1) Nussbaum 2019, pp.241-243.

1. *Life*. Being able to live to the end of a human life of normal length; not dying prematurely, or before one's life is so reduced as to be not worth living. (生命。標準の長さの人生を最後まで生きることができること、つまり早死にしないこと、あるいは自らの人生が衰退して生きるに値しなくなる前に死なないこと。)
2. *Bodily Health*. Being able to have good health, including reproductive health; to be adequately nourished; to have adequate shelter. (身体健康。健康であること(性と生殖に関する健康を含む)。適切な仕方では栄養が与えられていること、適切なすみかを持つこと。)
3. *Bodily Integrity*. Being able to move freely from place to place; to be secure against violent assault, including sexual assault and domestic violence; having opportunities for sexual satisfaction and for choice in matters of reproduction. (身体無欠性。あちこちへ自由に移動することができること、暴力的な攻撃から安全であること、これには性的な暴行と家庭内暴力が含まれる。性的に満足する機会と、生殖に関して選択する機会を持つこと。)
4. *Senses, Imagination, and Thought*. Being able to use the senses, to imagine, think, and reason—and to do these things in a “truly human” way, a way informed and cultivated by an adequate education, including, but by no means limited to, literacy and basic mathematical and scientific training. Being able to use imagination and thought in connection with experiencing and producing works and events of

one's choice, religious, literary, musical, and so forth. Being able to use one's mind in ways protected by guarantees of freedom of expression with respect to both political and artistic speech, and freedom of religious exercise. Being able to have pleasurable experiences and to avoid non-beneficial pain. (感覚, 想像力, そして思考。感覚を用い, 想像し, 考え, 推論することができること, これらのことを, 真に人間的な仕方, すなわち, 適切な教育によって情報が与えられ, 涵養された仕方, で為すことができるのであって, その教育には, 識字能力と基礎的な数学的・科学的な訓練が, もちろん決してこれらに限定されるわけではないが, 含まれている。自分自身の選択による宗教的, 文学的, 音楽的などの作品やイベントを経験したり創作したりすることと関連して, 想像力や思考をはたらかせることができること。政治的・芸術的双方のスピーチに関連して表現の自由を, そして, 礼拝の自由をそれぞれ保障することにより保護された仕方, で自分の心をはたらかせることができること。楽しい体験を持ち, そして無益な苦痛を避けることができること。)

5. *Emotions*. Being able to have attachments to things and people outside ourselves; to love those who love and care for us, to grieve at their absence; in general, to love, to grieve, to experience longing, gratitude, and justified anger. Not having one's emotional development blighted by fear and anxiety. (Supporting this capability means supporting forms of human association that can be shown to be crucial in their development.) (感情。私たち以外の事物や人々に対して愛情を持つことができること, 私たちを愛し気にかけてくれる人を愛し, 彼らがいないことを悲しむことができること。一般に, 愛すること, 悲嘆すること, 切望・感謝・正当な怒りを経験することができること。自分の感情的な発達が恐怖や不安によって損なわれないこと。(このケイパビリティを支えることは, 感情の発達においてきわめて重要なものとして捉えられうるところの, 人間の関連性の形態を支持することを意味している。))
6. *Practical Reason*. Being able to form a conception of the good and to engage in critical reflection about the planning of one's life. (This entails protection for liberty of conscience and religious observance.) (実践理性。善の概念を形成し, 自らの人生計画に関する批判的に内省することができる。(このことは, 必然的に良心の自由と宗教儀式の保護を伴う。))
7. *Affiliation*. (A). Being able to live with and toward others, to recognize and show concern for other human beings, to engage in various forms of social interaction; to be able to imagine the situation of another. (Protecting this capability means protecting institutions that constitute and nourish such forms of affiliation, and also protecting the freedom of assembly and political speech.)(B). Having the social bases of self-respect and non-humiliation; being able to be treated as a dignified being whose worth is equal to that of others. This entails provisions of non-discrimination on the basis of race, sex, sexual orientation, ethnicity, caste, religion, national origin. (協力関係。(A)他者とともに, そして他者に向かって生きることができ, 他者を認め,

他者に関心を示すことができ、社会的相互作用のさまざまな形態に携わることができること。他者の状況を想像することができること。(このケイパビリティを保護することは、協力関係のこのような諸形態を形成し育む制度を保護することであり、集会と政治的スピーチの自由をも保護することを意味している)。(B)自尊心と恥辱を受けないことに関する社会的基盤を持っていること。他者と同等の価値を持った威厳ある存在として扱われることができること。このことは、人種、性別、性的指向、民族性、社会階級、宗教、国籍に基づいて差別がないという規定を伴う。)

8. *Other Species*. Being able to live with concern for and in relation to animals, plants, and the world of nature. (ほかの種。動物、植物、そして自然界とかかわりを持ち、関係して生きることができる。)

9. *Play*. Being able to laugh, to play, to enjoy recreational activities. (遊び。笑うことができ、遊ぶことができ、レクリエーション活動を楽しむことができる。)

10. *Control over One's Environment*. (A). *Political*. Being able to participate effectively in political choice that govern one's life; having the right of political participation, protections of free speech and association. (B). *Material*. Being able to hold property (both land and movable goods), and having property rights on an equal basis with others; having the right to seek employment on an equal basis with others; having the freedom from unwarranted search and seizure. In work, being able to work as a human being, exercising practical reason and entering into meaningful relationships of mutual recognition with other workers. (自己の環境に関する制御。(A)政治的な制御。自らの生活を支配する政治的選択に効果的に参加することができること。政治的な参加と、言論および結社の自由を保護する権利を持つこと。(B)物質的制御。財産(不動産と動産の両方)を維持することができ、他者と対等に財産権を持っていること、すなわち他者と同等に職を求める権利を有していること、不当な搜索と押収からの自由を持っていること。仕事において、人間として仕事をすることができ、実践理性をはたらかせ、そして、ほかの労働者との相互に認め合った意義深い関係を結ぶことができること。)

(2) 佐々木 2018, 佐々木 2019 b, 佐々木 2019 d 参照。

(3) Robeyns 2005, p.66. One important aspect of Sen's capability approach is its underspecified character. The capability approach is a framework of thought, a normative tool, but it is not a fully specified theory that gives us complete answers to all our normative questions. It is not a mathematical algorithm that prescribes how to measure inequality or poverty, nor is it a complete theory of justice. The capability approach, strictly speaking, only advocates that the evaluative space should be that of capabilities.

(4) Sen 2009, pp.242-243. The search for given, pre-determined weights is not only conceptually ungrounded, but it also overlooks the fact that the valuation and weights to be used may reasonably be influenced by our own continued scrutiny and by the

reach of public discussion.

- (5) Robeyns 2005, pp.66–67. Why make normative assessments in the space of capabilities, and why would this framework be attractive for an analysis of gender inequality? In this section, I will discuss three strengths and one weakness of the capability approach for normative assessments in general and for gender inequality analysis in particular.
- (6) Robeyns 2005, p.67. The first advantage is that functionings and capabilities are properties of individuals. Hence the capability approach is an ethically (or normatively) individualistic theory. This means that each person will be taken into account in our normative judgments. Ethical individualism implies that the units of normative judgment are individuals, and not households or communities. At the same time, the capability approach is not ontologically individualistic. It does not assume atomistic individuals, nor that our functionings and capabilities are independent of our concern for others or of the actions of others. The social and environmental conversion factors also allow us to take into account a number of societal features, such as social norms and discriminatory practices. In sum, the ethically individualistic and ontologically nonindividualistic nature of the capability approach is a desirable characteristic for well-being and inequality analysis.
- (7) Robeyns 2005, p.68. The second advantage of the capability approach is that it is not limited to the market, but looks at people's beings and doings in both market and nonmarket settings. The inclusion of nonmarket dimensions of well-being in our normative analysis will reveal complexities and ambiguities in the distribution of well-being that an analysis of income or wealth alone cannot capture. This is especially important for gender inequality research. Feminist economists have long been arguing that economics needs to pay attention to processes and outcomes in both the market economy and the nonmarket economy. Inequality comparisons based only on the market economy, such as comparisons of income, earnings, and job-holdings, exclude some important aspects of well-being such as care labor, household work, freedom from domestic violence, or the availability of supportive social networks. They also miss the fact that women spend much more time outside the market than men. These aspects matter particularly in gender-related assessments of well-being and disadvantage.
- (8) 野尻 2011, 198頁。
- (9) たとえば、佐々木 2019c では、かかる三層構造と中間組織の原理である連帯性という経済倫理学の概念を用いて、アキナスの神学を分析している。
- (10) Robeyns 2005, pp. 68–69. The third strength of the capability approach is that it explicitly acknowledges human diversity, such as race, age, ethnicity, gender, sexuality, and geographical location as well as whether people are handicapped, pregnant, or have caring responsibilities.... Again, this characteristic of the capability approach is important for gender inequality analysis. Sen's concern with human diversity contrasts

strikingly with the tendency in standard welfare economics to neglect intra-household inequalities in nonmarket labor and total work loads. Equality is ultimately measured in “male terms” with an exclusive focus on the market dimensions. Feminist scholars have argued that many theories of justice claim to address the lives of men and women, but closer scrutiny reveals that men’s lives form the standard and gender inequalities and injustices are assumed away or remain hidden, and are thereby indirectly justified. For example, many theories of justice simply assume that families are just social institutions where love, justice, and solidarity are the rule. This assumption renders these theories inadequate in their very design for understanding or analyzing intra-household inequalities.... By conceptualizing gender inequality in the space of functionings and capabilities, there is more scope to account for human diversity, including the diversity stemming from people’s gender.

- (11) Robeyns 2005, p.69. However, these positive features notwithstanding, the capability approach also has one major drawback, which stems from its underspecified character. Capability egalitarianism, strictly speaking, only advocates that when making inequality assessments we should focus on capabilities. But every evaluative assessment, implicitly or explicitly, endorses additional social theories, including accounts of the individual, social, and environmental conversion factors, and a normative theory of choice. We get quite divergent normative results, depending on which social theories we add to the capability framework. If the social theories are racist, homophobic, sexist, ageist, Eurocentric, or biased in any other way, the capability evaluation will be accordingly affected.

- (12) Robeyns 2005, pp. 73-74.

- 1 Life and physical health: being able to be physically healthy and enjoy a life of normal length. (人生と身体的健康：身体的に健康であり、標準の長さの人生を楽しむことができること。)
- 2 Mental well-being: being able to be mentally healthy. (精神的健康：精神的に健康であること。)
- 3 Bodily integrity and safety: being able to be protected from violence of any sort. (身体の無欠性と安全性：いかなる種類の暴力からも守られていること。)
- 4 Social relations: being able to be part of social networks and to give and receive social support. (社会的関係：社会のネットワークの一部となり、社会的援助を与え、そしてそれを受けとることができること。)
- 5 Political empowerment: being able to participate in and have a fair share of influence on political decision-making. (政治への関与：政治的意思決定に参加し、それに影響を及ぼす公正な役割を有することができること。)
- 6 Education and knowledge: being able to be educated and to use and produce knowledge. (教育と知識：教育を受けることができ、知識を使い、知識を生み出すこと。)

ことができること。)

- 7 Domestic work and nonmarket care: being able to raise children and to take care of others. (家事と労働市場外のケア：子供を育てることができ、他者の世話ができること。)
 - 8 Paid work and other project: being able to work in the labor market or to undertake projects, including artistic ones. (有給の仕事とほかのプロジェクト：労働市場ではたらくことができるか、芸術的なプロジェクトを含むプロジェクトを手がけることができること。)
 - 9 Shelter and environment: being able to be sheltered and to live in a safe and pleasant environment. (住居と環境：住居が与えられ、安全で心地よい環境で生活することができること。)
 - 10 Mobility: being able to be mobile. (移動性：移動することができること。)
 - 11 Leisure activities: being able to engage in leisure activities. (余暇活動：余暇活動を行うことができること。)
 - 12 Time-autonomy: being able to exercise autonomy in allocating one's time. (時間の自律性：自分の時間を割り当てることにおいて、自律性を行使できること。)
 - 13 Respect: being able to be respected and treated with dignity. (尊敬：尊敬され、威厳を持って処遇されることができること。)
 - 14 Religion: being able to choose to live or not to live according to a religion. (宗教：宗教に従って生活する、あるいは生活しないを選択できること。)
- (13) この点に関して、筆者は2019年9月7日に熊本大学で開催された、経済社会学会第55回全国大会で、「ケイパビリティのリスト－アキナス・セン・ロビンズ－」という題で発表している。詳細は何らかの仕方で論文にまとめる予定である。
- (14) Nussbaum 2006, 165-166. The capabilities approach, however, can make a much more radical critique of the focus on income and wealth.... Before we can develop such a critique cogently, however, we need to adopt some list, however tentative and open-ended, of which capabilities are going to be regarded as central human entitlements in terms of which basic social justice is defined. I have suggested elsewhere that Sen's reluctance to make such a list make it difficult for him to use capabilities to define a theory of social justice.
- (15) 野尻 2011, 241頁。
- (16) http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2018.pdf
- (17) S. T. I-II, q. 94, a. 2, c. Quia vero bonum habet rationem finis, malum autem rationem contrarii, inde est quod omnia illa ad quae homo habet naturalem inclinationem, ratio naturaliter apprehendit ut bona, et per consequens ut opere prosequenda, et contraria eorum ut mala et vitanda. Secundum igitur ordinem inclinationum naturalium, est ordo praeceptorum legis naturae. Inest enim primo inclinatio homini ad bonum secundum naturam in qua communicat cum omnibus substantiis: prout scilicet quaelibet

substantia appetit conservationem sui esse secundum suam naturam. Et secundum hanc inclinationem, pertinent ad legem naturalem ea per quae vita hominis conservatur, et contrarium impeditur. -Secundo inest homini inclinatio ad aliqua magis specialia, secundum naturam in qua communicat cum ceteris animalibus. Et secundum hoc, dicuntur ea esse de lege naturali quae natura omnia animalia docuit, ut est coniunctio maris et feminae, et educatio liberorum, et similia. -Tertio modo inest homini inclinatio ad bonum secundum naturam rationis, quae est sibi propria: sicut homo habet naturalem inclinationem ad hoc quod veritatem cognoscat de Deo, et ad hoc quod in societate vivat. Et secundum hoc, ad legem naturalem pertinent ea quae ad huiusmodi inclinationem spectant: utpote quod homo ignorantiam vitet, quod alios non offendant cum quibus debet conversari, et cetera huiusmodi quae ad hoc spectant. なお、この個所の解釈としては、佐々木 2008, 102-107; 佐々木 2019 a, 8-11; 佐々木 2019 c, 110-131 参照。

(18) 佐々木 2019 e 参照。

文献表

- S. T. Aquinas, Thomas, *Summa Theologiae*, ed. Paulinae, Torino: Commerciale Edizioni Paoline, 1988.
- Nussbaum 2006. Nussbaum, M. C. *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership*, London: The Belknap Press of Harvard University Press. 神島裕子訳, 2012『正義のフロンティアー 障害者・外国人・動物という境界を越えてー』, 法政大学出版局.
- Nussbaum 2019 Nussbaum, M. C. *The Cosmopolitan Tradition: A Noble but Flawed Ideal*, Cambridge- London: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Robeyns 2005 Robeyns, I., "Sen's Capability Approach and Gender Inequality: Selecting Relevant Capabilities", Agarwal, B., Humphries, J. and Robeyns, I. eds. *Amartya Sen's Work and Ideas: A Gender Perspective*, Abingdon- New York: Routledge, 63-94.
- Sen 2009. Sen, A. *The Idea of Justice*, London-New York: Penguin Books. 池本幸生訳, 2011『正義のアイデア』, 明石書店.
- 佐々木 2008 佐々木 亘『共同体と共同善ートマス・アキナスの同体論研究ー』, 知泉書館.
- 佐々木 2018 佐々木 亘「他者と共同善ーアキナス正義論の現代的可能性ー」, 『経済社会学会年報』第40号, 現代書館, 107-117頁.
- 佐々木 2019 a 佐々木 亘・佐々木 恵子「自然法と人格ーアキナス・メスナー・

- 佐々木 2019 b 田中－, 『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第49号, 1-14頁.
佐々木亘「ケイパビリティのリスト－マーサ・C・ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチ」, 『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第49号, 15-30頁.
- 佐々木 2019 c 佐々木亘『トマス・アキナスにおける法と正義－共同体の可能性をめぐって－』, 教友社.
- 佐々木 2019 d 佐々木亘「ケイパビリティと自然法－アキナス・セン・ヌスバウム－」, 『経済社会学会年報』第41号, 97-108頁.
- 佐々木 2019 e 佐々木亘「神島裕子著『正義とは何か 現代政治哲学の6つの視点』中央公論新社, 2018年」, 『経済社会学会年報』第41号, 231-232頁.
- 野尻 2011 野尻武敏『経済社会思想史の地平』, 晃洋書房.

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「スコラ哲学における正義論の変遷－トマス・アキナス以前・以後－（16K02225）」、および、同（科学研究費補助金）基盤研究（B）「統合的経済倫理学に基づくポスト福祉国家レジームの構築：多元的秩序構想の実践的展開（17H02505）」の助成を受けたものです。

謝辞

本学英語科の小田智代准教授より英文の日本語訳に関して貴重なアドバイスを受けることができた。この場を借りて、心から御礼申し上げます。

